特251
91

納本

○生産擴充と統制會問題

○增産促進の綜合性

○大量生産と質の問題

○生産活動と必需品配給

0023777000

0023777-000

特２５１－９１

生産と配給

日満支拓殖文化研究所経済資料部・編著

日満支拓殖文化研究所

昭和１７

ADD

生産と配給

日滿支拓殖文化研究所編著

特 251
91

納本

○生産擴充と統制會問題

○增産促進の綜合性

○大量生産と質の問題

○生産活動と必需品配給

東京 日滿支拓殖文化研究所 刊行

特251
91

日滿支拓殖文化研究所
經濟資料部編著

生産と配給

東京 日滿支拓殖文化研究所刊行

帝國圖書館藏

序

今や大東亞戰爭完遂上一億國民の疑集力は、かゝつて生産增强の一點に集中されてゐる。かへり見るに支那事變勃發以來、まづ物資の消費配給統制に始まつたわが國戰時經濟は、次いで加工製品の生産統制、原料品の生産增强、勞務動員の達成等漸次重點を移行し來たつたのであるが、今日生産力の增强こそが我々國民の擔へる刻下の重大使命となつてゐる。この觀點に於て重點的角度より生産と配給の諸課題につき言述の小冊、幸にして各位に一の示唆を提供するあらんは、深く編者の念願とする處である。

昭和十七年十月

編著者識

目次

○生産力增强と能率問題……（二）
○組織に頼りすぎの弊害……（五）
○增産促進と生産配給消費の綜合性……（八）
○生産擴充と勞務者對策……（一三）
○物價政策と賃金指數……（一八）
○生産擴充と統制會問題……（二四）
○生擴完遂問題と政府の施策……（三〇）
○生産擴充と國策會社の刷新……（三六）
○配給消費面と生産品の質……（三九）
○大量生産と質の問題……（四四）
○生産活動と食糧配給の改善……（五〇）
○必需品配給と運用の圓滑化……（五三）

生産と配給

世界戰爭は愈々長期戰態勢に入つて來た。然して今日大東亞戰爭が、文字通り總力戰であることは、何人も異論のないところである。すなはち、世界において最も富强なる米英を相手とする現戰爭においては、餘裕をもつて勝利を確保するが如きは絶對に豫想されない。國家のあらゆる力を傾注して、初めて輝かしい戰捷の彼岸に到達し得るのみである。しからば、總力戰的な經濟體制とは何ぞや。それはある意味において軍需物資と民需物資の、區別を知らぬ經濟體制であり、國民のあらゆる生産消費活動が、直接戰勝に連る體制である。

以下生産增强の諸問題につき各頁を通じて重點的に諸士に一の示唆を提供することゝしたい。

○生産力增强と能率問題

生産力增强と關聯して近頃能率增進問題が喧しく論ぜられてゐる。或る者は生産技術の昂揚をいひ、或る者は工員の精神的作興又は國家褒賞制の確立を述べる。けれども今日の能率問題は、舊來の能率問題とは根本的にその性格を異にすべきであつて、或る意呼では、從來アメリカあたりで研究され盡された能率增進のための諸條件は一應否定するところから出發しなければならない。

能率の概念は今日までおよそ次の如き段階を經て發展してきたのである。

（一）能率即ちエフイシエンシーとして促へられ、それはひとへに機械化自動化の方向において理解される。故にこの段階にあつては、工學又は技術學の發達が基礎條件で、人間（勞務者）は明かに生産手段（主として機械）に從屬する。

（二）個別的企業の生産管理經營技術の問題として理解される。テイラーシステムはその典型で、こゝでは專ら管理の合理化が能率問題の中心となる。（第一次歐洲大戰前）

（三）第一次大戰後各國は破壞された生産體系の再建を企圖する必要上、生産經營全域に亘る合理化が問題となり、特にドイツにおいて所謂ラチヨナリジールンク問題として能率化が再檢討された。

（四）しかし合理化による世界經濟の安定はやがて恐慌へと突入したので、こゝに國家總力をあげての計畫經濟化が問題となつた。（このトップを切つたのがソ聯の第一次五ヶ年計畫）從つて能率問題はこゝに初めて個人企業としてでなく、全國民經濟の立場から把握される端緒を切り開いた、これが今日の能率問題の視角である。

斯く見來れば、いまや資本主義體制を如何に合理化（能率化）するかが問題ではな

く、國民經濟の全き運營の上から資本主義を如何に修正するかが問題でなければならぬ。即ち資本主義から能率を考へずに、逆に能率から資本主義を考へるのである。而してこんにちの我が國の能率問題も正にこの觀點から扱はれねばならない。換言すれば今日の機構を絶對的前提として能率問題を挿入すべきでなく、百パーセントの能率を發揮せんがためには、如何にして合理的な全體的經濟體制を建設すべきかといふ、この點から理解さるべきである。然らば單なる技術の振興も、勞務者の精神訓練も、褒賞制も、それだけではかなり機械的であることがわかるであらう。故に前提となるべきは、共同體的社會であつて、勞働の主體化が先づ確立されねばならないであらう。從來は勞務者は能率問題の一客體であつて、如何にして勞務者を働かしめるかに懸つてゐた、そのために生活上の脅威感から精神訓話、褒賞制に至るまで善惡樣々の手段が利用されたが、結局勞働者の精神において個人的利害感からの勞資協調精神以

上には出なかつたのである。これではいけない。故に勞務者に形式的な時局觀念を與へる前に先づもつて社會、經濟の組織が勞働の主體化を可能ならしむるよう、眞に全體主義的のものにならなければいけない。然らば生產能率はこの側からも自然に發揚さるべく、能率問題は一歩前進するものといふべきであらう。但しこの指すところの全體主義的組織とは、生產經濟的方面のみに限定されたものを指すのではない。この過去の組織への賴りすぎは一の弊害と見られるのであるから、これと混同されてはならぬのである。

○組織に賴りすぎの弊害

かつて大東亞戰爭前において、支那事變を戰ひ拔きつゝあるわが國經濟の强靭性に對する批判として、組織力と云ふことが强調されたものである『今日の戰ひは長期戰

である。長期戰は結局經濟力である。その經濟力からみる限り日本經濟は弱い』となす米英の唯物的觀方に對し、實は平然と、否むしろ戰爭を通じて更に强化してゆくわが國の經濟力を、これは結局のところ戰爭と共に進められた組織力であるとなされたのである

勿論わが國の經濟が統制の强化、統制組織の巧妙なる運營により益々對戰時形態を進めて行つたことは事實であり、これによつて戰爭から起る一切の經濟的惡弊即ちインフレ、物價騰貴、物資偏在、生活の不平等などを克服してよく對支戰の强力なる遂行と併せて國防經濟の發展を齎らしたものであることは否定出來ない。

然しながら、その後のわが國經濟界或は其他一般に就てみると、ともすればその組織の力にのみ賴りすぎる傾向のあることは、關係識者の特に留意を要することである。『運營が巧みでない、これも組織が惡いからだ、生產と物價が二律背反する、これも組織が惡いからだ』となすが如きを、唱へる人が多いのである。唯物的な米英を克服して、人格を中心の、道義に基いた大東亞共榮圈を建設すべきでありながら不知不識の間に、物を中心とした組織の力に賴りすぎる傾向が、既にその萠芽を表はして來かけたのである。

從つて、各方面で組織替が著るしく行はれる、固より正當にしてより强力たるべき必然の下になされるものも多いのであるが、それにしても再編成、組織替、更にその反面編成が、次から次へと行はれがちなのである。組織だ、再編成だと云ふ言葉は、何か日本の經濟について論する場合の附きもののやうでさへある。

未だ事業を始めて間のない組織、結成されて間もない經濟團體或は政治團體までが組織が出來上ると同時に、既にもう組織替を口にされると云ふ極端な例も皆無ではない。その間肝腎のその組織の目的である仕事の內容は、そこに集まつた人の和の力を

十分に活かし發展さすことが出來ず、徒らに理論のみに走つ〻現實への空廻りを示してゐるのである。

これらは、結局組織に賴りすぎる弊害とみられる。組織は固より必要であるが、それが十分に力を發揮する爲には、切瑳琢磨された人間の力、或は人間と人間の和の力がなくてはならず、人が組織を動かす大きな力とならなくてはならないのである。

○增產促進と生產、配給、消費の綜合性

今日我々一億國民の必勝の精神はむろん世界的精神である。だが實を云へば必勝それ自體が究極目的なのではなく、必勝によつてのみ可能となる世界史的轉換、歷史的理想實現が究極の目標でなければならないのである。そして歷史的に必然な戰爭の遂行は、それだけの實力、文化的意義、手段等をそのうちに包藏してゐるのであつて、

されば「勝ち拔く」ことそれ自體が疑ひもなく世界史的事件となるのである。

けれども「必勝」の二字は言ふことの易くして、實現の必ずしも容易なものではない。固より、日本國民における必勝の信念は確固不拔であるが、又それだけに必勝に至る諸要件を絕えず反復して行くことが肝要である。

この意味に於ては重要物資の劃期的增產の爲に政府は凡ゆる手をつくしてゐる。統制會の創設は將來の我が重要產業、所謂高度國防國家建設の一環として確立せねばならぬ必需產業の飛躍的發展の組織であり、中小企業の整備統合は必需物資の生產增强を圖るための重點的資材の配分勞務動員の緊急措置である。

最近における重要物資に對する增產强調週間の設定、大政翼賛會を中心とする各種の國民運動等何れも直接、又は間接の增產促進運動とみることができよう。

而して之等の運動による實効をきくに、何れも相當の成績をあげてゐる事實は時局

柄欣快の至りであるが、想ひを大東亞戰爭の長期性、世界騷亂の客觀的情勢に馳するとき、なほ一段の强力なる恒久的持久力ある增產促進の國民運動が展開されねばならない。然も國民各層の中から自發的にもり上らねばならない。

東條首相は戰時非常金屬增產期間中に全國の鑛業戰士に對し「諸君は今日の諸君の鶴嘴によつて少しでもより多くの金屬を增產することはとりもなほさず大東亞戰爭の完遂に協力する所以である」意味の言葉を贈り、職域奉公自體が即聖戰協力なる旨の自覺を力强く促してゐる。また山間の僻村に木炭增產の製炭夫を激勵した際も、同樣極めて簡明率直に職域奉仕と聖戰完遂の協力の一體性を解明し、彼等をして感動せしめてゐる。蓋し不可能を可能となし得る强靭なる精神力喚起に求めた首相の細心さが首肯される。

增產促進運動の現狀をみるに、物自體に對する增產については勞務、資材、輸送、資金、技術等その生產の條件についての適正な措置による對策が行はれる一方、生產者自體に對しては時局認識の昂揚、職域奉仕の自覺の精神運動が行はれてゐる。所謂生產の促進については物心兩面の運動が展開されてゐるが、その間なほ生產の現場をして感應道交せしめるに一抹の物足らなさが感じられる。これは運動自體が往々にして生產現場の呼吸と一致せざるところから、生產自體の昂揚促進と遊離する結果であり、運動者自體が餘りにその生產の實相を理解せざる場合において露呈される。

從つて將來の增產運動は、先づ生產者自體の時局認識、職域自覺の崇高なる理念の下に現場の中に增產挺身隊を形成し、之が增產促進運動の中核組織體となつて、全體の生產活動を强力に推進すろといふ形態が製鐵、鑛山に、機械に各工場、現場の中に生誕されねばならぬ。而して各外廓の國民的增產運動は各自の觀點、立場から、增產に必要なる諸條件を動員、强力なる支援を與へるとともに、その得たる資材は使用に

配給に、消費に、最高度の合理的活用を圖る運動の展開も必要である。

増産促進運動は刻下極めて重要であるが、この運動の得たる實績維持の運動は更に重要である。次に又生産擴充と勞務者對策について少しく記述することゝする。

○生産擴充と勞務者對策

現下最大の要望生産力の擴充は、結局勞務者の増大によらねばならず、そして一人當りの最高能率發揮によつて、人口による制約を補はなければならないのであるが、最近勞働界における二三の現象は、必ずしもこの理想の如く行はれてゐない傾向がある。

先づ第一に勞務者の重點的配分であるが、これは周知の如く勞務手帳を通じて嚴重に行はれてゐる筈なのであるが、事實は相當の闇が行はれてゐる形勢にあり、勞務手

帳をもたずして、高賃金を追つて移動する勞務者が相當あるかの如くである。雇入の方も勞務手帳をよしんば持たない者にしても、自社手持の勞務手帳をもつて頭數を合せ、かくして形式的な合法によつて、徒らに高賃金の勞務者が現出する狀態である。

一方また勞務者自身にしても、勞務者逼迫の事實を知ることから、曾つての自由主義經濟における需給觀念に捉はれ、何時でも罷める式の考へ方をもつて、不能率な勞働を敢てする癖が見出されつゝある。日本精神が最高度に發揮されるべき產業非常の秋にありながら、只わけもなく高賃金の需給の不自由を楯に、半怠業式な心理を出すが如き勞務者が見受けられるとするなれば、今にして嚴重に對策を講ずべきであらう。

今日又戰時經濟確立による一面に於て、中小企業および配給商業の整理が相當進捗しつゝあり、轉廢業による時局產業の勞務者が現實の問題として漸く人員を増して來

てゐる。そして之ら轉廢勞務者の多くは大體において四十を越してゐる人が多く、所謂工場勞務者としての適齡期を多分に越えてゐるが故に、決意と處理において特別のものが拂はれなければならない。

即ち、轉廢勞務者は、まづ一應社會的にも一人前として待遇されて來た人達であり樂も苦も大人のそれを經て來てゐる人達である。從つて普通の所謂勞務者に比較すれば贅澤面への接觸が多く、餘程の決意を抱かない限り、眞に勞務者としての價値を發揮する事は困難である。口だけが、頭だけが先に立つて肝腎の勞力がとかく出澁る事を懸念してかゝらねばならないのである。

轉廢業勞務者は目下企業整備のなかから供出されてをり、謂はば犧牲的の觀念を多分に看てゐることから、ともすれば時局に甘やかされようとする傾向のあることも深く留意すべきである。一人前の本來の勞務者が平氣でなして來たことでも、轉廢勞務

者がそれをなすと、時代の英雄に近いものとされがちなのである。

勞働は、殊に今日の大量的勞務は、嚴重なる規律と團體意識の下に初めて所期の効果を發揮するのであつて、なまじ轉廢勞務者が特別の觀念でも、其間にもつが如きことがあつたりしては、全勞務者對策の點から相當大きな問題である。

一方轉廢勞務者を吸收する側の點から考へても、わが國の機械勞働工程は未だ必ずしも高度な科學的操作のみをもつて居る處迄凡てが來てゐるといひ難く、それだけに只人手が足りないから手近な轉廢勞務者をと云ふ式に考へては、生産能率向上の點からしても一應考へものであらう。

わが國の機械操作が、今日の轉廢業者を十分に吸收して、こゝに生産能力を昂めてゆく爲には、今日以上にこれが高度の合理化をなされねばならず、從來の勞務者が一人減る度に、新たにこれを轉廢業者をもつて充當しさへすれば良いとなすが如き安易

的、惰力的對策に終つてはならないのである。

轉廢業勞務者續出の問題は、それが、戰時經濟としての整備合理化の促進と一方勞働力補充の兩面から、いま最も時局の脚光を浴びてゐるわけであるが、これの解決も又最も良き方策を必要とするのである。

次に少しく女子勞務者の問題につき述べる。

現代總力戰は一國を擧げての人的資源の爭鬪である。勝敗を決する有力な因子は啻に戰鬪的形態における人間力であるのみならず、生產力の基底たる人間勞力の質量如何にある。これ長期戰のもと、勞働力給源の涸渴が綜合的勞働力再編成を目指す國民動員の完遂を要請するゆゑんである。就中男子勞務者の應召に伴ふ勞務今日の不足に對應して女子勞務代替が課題となつた。

現にわが國の國民動員計畫においても、軍需產業における女子勞務の利用は最近漸

く重要性を加へつゝある。わが國工業構成は重化學工業が低位にあつたため、從來軍需生產方面における女子勞務の利用は極めて微々たるものであつたに拘らず、支那事變以來この方面への年少女子の本格的進出は相當著しいものがあり、事變前に比し約四倍の增加率、男子に對し一四%の割合を示した。すなはち、檢査工、組立工、仕上工、製圖工、旋盤工、フライス盤工、ボール盤工、平削盤工、型削盤工、研磨盤工、プレス工、鑄物工、更に至難とされる熔接工、木型工部面にまで進出し好成績を擧げてゐる。これは作業方法の分化と、自動化による反覆的單純作業に女子の身體的精神的特性が適してゐるため、大量生產面に對する能率を大いに發揮し得るからである。

從つて今後官民とも大いに努力して適性檢査、身體の特殊な檢査、豫備的訓練、養成方法を講ずるならば、未婚女子を時局產業に大量配置し、男子勞務に代替もしくは補助し得て男子勞働力の餘裕を捻出し得るにちがひない。時局下わが國女性は、纖維工

業農林水産方面または事務勞務を充足し、女子勤勞報國隊の活潑な活動など、眞に男子をして堂若たらしめるものがある。しかし他方都市における不生産的な輕佻浮薄な生活を送つてゐる女子が多數存在することを考へれば、女子勞務の大量的動員配置を行ふ餘地はなほ十分にあると思ふ。

たゞ農村に付言したいのは、女性本然の母性的活動障害を來さしめぬやうに、女子勞務に關する特別な保護ないし管理施設がなされねばならぬことである。女子の特殊な生活條件を考慮し、十分の榮養と休養と教養とを當然かれらに與へなければならないことである。

○物價對策と賃金指數

こゝにとりあげた物價問題は戰時經濟政策中の最重要問題の一つである。物價は消

費に密接に關係するところから、國民生活を對象として先づ採りあげられるが、然し今日では、むしろ生産の問題と關聯して重視されるところに特徴がある。

物價それ自體は生きものではない。物價を物價として奔放たる生命を與へるのは全經濟の動きであり社會の構造である。從つて經濟の本質に關する觀方、社會構造の本質に關する觀方が物價問題の視角を決定する。例へば經濟を人間の意志から獨立せる自然法則によつて支配されると考へる立場からすれば、物價對策の方法は自ら異つてくる。

現在の經濟に對する考へ方は、一般的に云つて政治の優位性にある。經濟が政治を左右してゆくのではなくて、政治が經濟を左右してゆくのである。從つて政治の形態が、內容が、制度が、そこに動く意志が、經濟を決定する。この觀方からすれば、國民經濟學は政治經濟學であり、スミス以來の英米の經濟學の否定である。

今日の經濟政策は正にこの認識の上に立つてゐる。これは誤りでない、誤りでないのみならず、新しい經濟理念を創造し、新理論を樹立してゆくところに、戰時政策の進展が約束されるわけである。

然し、それだからと云つて、一片の法令さへ發布すれば、物價はどうにでもなる、といふ粗暴な結論は出て來ない。そこにマル公、マル停を規定しながら、尙肝膽を碎く當局の苦心が存する所以である。

結局、物價は人間の恣意が決定するのでなくて、歷史の必然と經濟の本質を把握した國家の意志から決定するといふより外ないであらう。從つてそこには目的提立とその實現のための計畫と、これを可能ならしむる歷史法則に對する認識がなければならないのである。而してこの上に國家の物價政策は行はるべきである。

戰時經濟に於ては、やゝもすると物價政策の積極的役割を等閑視して、たゞ平均的機械的低水準への抑壓をのみ評價する考へ方が支配的になつてくるおそれがある。これはしかし、非常な間違ひで、さういふ傾向が惡化すると生產力擴充工作に支障を來すおそれがある。この意味に於ては生產擴充第一主義によりよき物價政策を添加せねばならぬのであらう。

以下少しく賃金指數について述べる。

最近の賃金指數は實質賃金のそれにおいても著るしい昂騰を示してゐる。賃金の騰貴は支那事變以來、勞働力不足の原因から漸次表面に現はれてきた事實で、一方物價の昂騰と睨み合はせれば、この理由からもまた已むを得ない次第であつた。ところで物價の無制限騰貴と同樣、賃金の昂騰を自然の勢ひのまゝに放置して置くことは、戰時經濟の運營上から到底看過し得ないことなので、政府は周知の如く低物價政策を施行すると同時に、賃金統制令その他の法令を發布して適正賃金の維持につとめ、特に

昨年八月、最低賃金及び最高初給賃金制を施行し、同十月には平均時間割賃金制を實施した。

しかしながら現實の社會に行はれてゐる賃金の內容は、よく一片の法令をもつてしては左右し得るものではなく、その證據に、商工省調べによる賃金指數の動向を見ると、依然向上線を辿つてゐるのである。即ち本年三月の指數は昨年同期にくらべると二八%の增大で、一七三・五%である。この騰貴率は物價のそれに比較すると、最近は公定價格規定の範圍が擴大したため前者が一般に稍鈍化してゐるので、名目賃金のみならず、實質賃金においても相當の騰貴を示してゐるといはれてゐる。

そこで注意したいことがある。それなら一般勞務者の生活はそれだけ一嚴密にいへば騰貴率だけ、樂になつたであらうか、理屈は正にさうでなければならない筈であるが、事實は必ずしもさうであるとは限らない。いつたい統計に現れる指數は統計としては勿論正確なのであるが、物價にしろ賃金にしろ、それが直ちに個々の生活を實際に規定してゆくなどとは誰にせよ考へまい。こゝに勞働對策、勞働厚生政策を益々活潑に行はれねばならない理由がある。むろん今日の勞働對策は勞務者層を抽象化し、劃一化し、その上で行はれる觀念的、人道主義的なそれであつてはならない。宜しく今日の勞務者階層の實體を現實的に把握して、戰時下における眞の實情に觸れた生ける勞働對策、而してそれが直ちに我が國の生產增强に資する態のそれでなければならないことは言を俟たぬ。このことは誰でも氣づく點であるが、實質賃金の統計上の向上を見て、勞務者一般の生活がそれだけ直ちに樂になつたなどと輕卒な結論を下す者があつたなら、而してそのために少しでも一般厚生施設を怠ることがあつたなら、能率增進、生產增强の敵であると心得なければなるまい。次に少しく統制會の諸問題につき述べることゝする。

○生産擴充と統制會の問題

統制會は生産擴充國策の線に沿ふて發足し、戰時經濟の充實進展に寄與すべき重大なる任務を有するのである。其の萬全なる機能を發揮するや否かは戰時經濟進展過程に於ける重大なる問題である。然して現下統制會問題の眼目は何んであらうか？

權限と權威への反省

統制會擴充こそが生産力增强の最大根本なりとする處より出發して、最近統制會强化の眼目としては、……

各省よりの權限委讓が急務とされてゐるが、行政各省從來の複雜な事情も手傳つて結局商工省のみの單獨委讓となり、これが解決には、前途曲折が豫想されてゐる。

それにしても、統制會自身の問題として、權限委讓がなければ强化は出來ぬとばかり、その活動を緩漫にして良いが如き理由は聊かも見當らないのである。むしろこの權限委讓の遲延を、內部活動の强化によつて補ふだけの決意をもつて活躍すべきである。

既に設立された統制會、或は現に設立されつゝある第二次指定の統制會にしても、設立されるまでの間は如何にも華かに囃し立てられるのであるが、さて肝腎の、設立されてからの活動は、何れかといへば低調そのものである。統制會は、全企業を指導すべき役割をもつ革新日本經濟の前轍であるにもかゝはらず、單に事務處理的な機關に墮し易く、徒らに煩雜なる書類手續によつて、むしろ業界の複雜性を齎す結果を招來しがちである。

統制會が、このやうに事務本位に墮する結果は、統制會長は單に統制會の事務局に

おける長たるかの觀となり、個々の會社を統轄指導するといふよりも、これと同地位の下に、或ひは併立し、或ひは對立するかの感じさへ抱くものとなり、統制會を生誕させるまでの大きな理想である新日本經濟機構の主軸としての統制會の姿には未だ遠しの狀態にある。

日本の財界は、現に戰爭遂行のために統制會指導者原理の導入を是非必要とされながら、實はその指導者を生み出す道程としての理論乃至實力の試練論爭を經てをらず從つて、資本を背景として自己會社の指導には自信があつても、資本關係を絶つての單に人的要素を基礎とする業界指導の自信は、その殆が持ち得てゐないのである。從つて統制會を强化するのに、一にも二にも權限の委讓にたよる結果となり、各省との間に、鷄と卵の論爭を繰返すことゝなる。

統制會の强化は何としても焦眉の問題であり、それをなし遂げないことは實に財界人の全般的恥辱でもある。先づ既設統制會の强力な活動によつて、こゝに清新にして魅力ある息吹きを入れることである。それには先づ權限と權威への識別が必要であらう。權限も必要であらうが、權限だけで人間の問題は解決するものではない。

人格、識見、熱と力

そも統制會の組織は、わが國の經濟を指導者主義の下に計畫的に運營することに主眼がおかれ、政府と協力して綜合的計畫性の確立を期しつゝあるものである。

從つて統制會長の指導者的權威乃至意識などは、當該全業界に滲透すべきほどのものであるべきであり、自他ともにその人格識見等において第一人者的に赦されるべきものたるは云ふ迄もない。それは又、單に年齡的經驗に當該業界の先輩たるに止まらず、東亞新秩序建設のための經濟新體制確立に對する識見認識においても、力と熱を

もつて衆を率ゐる人でなくてはならない。

さてこの様な條件の下に既に成立した第一次指定の統制會及び成立しつゝある第二次指定の統制會々長をみる時、果してこれら統制會長は、新秩序への認識と會員への權威において、當該業界を強力に指導し得るかどうか、一應反省してみる必要があると思はれる。業界人は兎角口を開けば自治的統制と、官僚組織の非能率性を攻撃したがるのであるが、果して今日の如き新秩序建設の過程において、眞に一人の指導者の下に國家目的に向つて協力一致し、國家の必要とする結果をあげ得るかどうかは、今日見受られる統制會長に對する服從の態度、或はその銓衡の態度についてみる時、甚だしく疑問視されるからである。この點は第二次指定の各界統制會の會長選出の過程についてみても、到底決定後の會長に心からの協力と指導に服する覺悟があるかどうかを疑はしめるに十分である。

極端な許言をなすものゝ言葉を借れば、統制會長は、統制會の事務局にのみ威令が行はれ、肝腎の統制會員に對しては、さして權威をもたないとさへ云はれる有樣である。と云ふのは、わが國の財界は、未だ何としても個々の企業資本單位の人物が、横の繋がりとしては、高々資本的關係か友誼的關係をもつに過ぎなく、從つて一財界人の權威なり、威令は單にそれが屬する資本、會社の範圍を出でないのである。然も、統制會長として選出されたものは、その屬する資本からも遊離することゝなる結果、わが國財界の習慣からすれば、全く威令の基礎を失つたことになり、かくして、結局事務局にのみ指導權威をもつに至る。

統制會の確立、特にその權威の確立は、國防經濟體制上の急務であるが、統制會の上に立つて、これを指導すべき人物の權威が生れずしては統制會長は到底、人格的な然も能率的な仕事をすることは難かしいのである。

政府は相當思ひ切つて統制會長の權威確立の手段を講ずべきであり、業界も亦徒らに舊來の慣習に囚はれて資本による權力にのみ服するが如き態度を改め、眞に有能達識なる人が會長として出馬する環境をつくり、それの權限よりもその人格權威を尊重する事が結局、統制會の眞使命を達成することゝならう。

次に第三回中央協力會議に於ける生擴完遂問題につき少しく述べる。

○生擴完遂問題と政府の施策

大東亞共榮圏建設への一億の燃え上る熱意を反映し、戰時下緊喫の要請たる皇道精神の昂揚、國民錬成教育の强化刷新、行政機構の改革等に鐵火の熱論を展開、異常の緊張裡に前回開催せられたる第三回中央協力會議第二日の總會において、岸商相は政府施設として大要つぎのごとく發言し、經濟單位の一人一人が挺身戰時經濟建設に邁進すべきを强調、この意味から中小商工業の再編成に協力し、物價政策の圓滑なる遂行を期するため經濟道德の昂揚につき國民の反省を求め注目された。

近代戰において一國の產業經濟に關する施設運營が、作戰の重要なる支柱となることは申すまでもないのであるが、戰爭が長期化するに伴ひその重要性は一層加重せられるのであつて、いまや作戰に並行して急速に經濟建設を完成することがわが產業經濟に課せられた絕對の要請になつてゐるのである。しかしてこの重大なる使命を遺憾なく施行するがためには、產業經濟のあらゆる分野における眞の總力戰體制を確立强化し、經濟單位の一人一人が挺身、經濟建設に邁進することがなによりも緊要であると思ふ。政府においてもかやうな事情にかんがみ、生產の增强と戰時國民生活の確立とを二大眼目とし、國家經濟力の最高度發揮を目指して各般の方策を講じ、鋭意これが圓滑なる實施につとめてきたのであるが、今度さらにこれを促

進徹底しなければならない。

第一に物資動員計畫、生産擴充計畫である。これらはわが國戰時經濟の中樞をなす計畫であつて、物資動員計畫は戰時の尨大なる需要、とくに軍需と生産擴充用需要を充足して國策の施行に支障なからしむるとともに、國民生活の最低限度を確保せんがために、昭和十三年より樹立せられてゐるのである。物資動員計畫と表裏一體をなす生産擴充計畫は重要なる十五品目につき、昭和十四年一月に四ヶ年計畫として樹立せられ、十六年度をもつて第一次の計畫を終了した。しかしてこれらの計畫の實施にあたつては各般の統制機構を整備し、物資の移動を重點的に調整するとともに、生産の統制、回收措置の强化、輸送、電力、勞務などの生産諸要素の規正强化などを行つたが、さらに計畫確保の補完的機能を擔當せしめるために産業設備營團、物資管理營團を設けたのである。これらの諸方策の實施によつて物資動員計

畫および生産擴充計畫は概ね順調なる實施を見、ことに强力なる生産擴充計畫の遂行は我國産業構成の基調に重大なる變化をもたらし、わが國重工業は、事變前に比し飛躍的發展をとげ、國防經濟體制の確立に資してゐるところは極めて大きいと思ふ。第二次の生産擴充計畫はさらに今後の大東亞共榮圈の規模などを考慮し、圈内に均衡を得たる産業を建設する意圖のもとに鋭意考究を進めてゐるが、さしあたり十七年度の年間計畫の決定を見た。その大體の構想は最近の事情にかんがみ增産を第一義とし、もつぱら海上輸送力の强化をはかるとともに、設備の擴充については徹底的な重點主義を採用せんとするにある。

現下の情勢において、生産力の增强に對しては各種の障碍が横たはつてゐるが、與へられたる條件のもとに最高度の能率を期することは、戰時生産上とくに緊要であるから、産業に從事せられる方々はこゝに深く思ひをいたし、潑剌たる創意工夫

と眞摯なる努力をもつて生産增强に邁進していただきたい。

第二に産業統制機構の整備であるが、政府は國家總動員法にもとづき、重要産業團體令を制定し、重要産業部門に對し統制會の結成を進めつゝあるが、統制會組織は官廳統制の缺を補ひ民間の經驗を十分に活し、指導者原理による會長の高明なる指導のもとに皇道經濟を宣揚いたさうとするものである。政府は統制會への權限委讓について準備を急いでをり、近くこれが實施をみることゝなつてゐる。統制會の强化育成については、とくに積極的なる熱意をもつて臨んでゐる。

第三に中小商工業の再編成の問題である。巷間大東亞戰爭の赫々たる戰果に眩惑せられて、たゞちに南方諸地域の重要物資が豐富に供給せらるゝものゝごとく速斷し、ために中小商工業の再編成の如きはその必要なきにいたつたと考へる向もあるが、大東亞において、今後わが國が占めるべき軍事上、經濟上の地位を思ひ、また

共榮圈の需給の關係を仔細に調べ、さらに輸送力その他の現實の事情を考慮するときは、決してかゝる安易なる期待を抱くことは許されない、かくのごとき見地より政府はますます本方針を强行することゝなつた。

第四は物資の生産配給ならびに消費の具體的統制運用の方針である。これは、はじめは輸出入品等臨時措置法にもとづく省令により統制してゐたが、時局の進展に伴ひ、總動員法にもとづく物資統制令を根幹として統制を强化しようとしてゐる現狀であつて、臨時措置法にもとづく省令も漸次これに振替へられてゆくことになつてゐる。

政府においては事變以來極力低物價政策を維持してきたが、今後もこの政策を强行する所存である。しかして低物價と申しても、いたづらに物價を釘付にすることを意味するものでなく、生産增强とも睨合せ補助金、プール價格などの實施と併せ

考へ、惡循環をきたさぬかぎり適正なる改訂を加へて參る考へである。元來物價は經濟の綜合せられた現れであるから、物價政策は生產、配給、消費の各部面における政策と相應じ實施する必要があるのみならず、大東亞共榮圈全體を通ずる經濟結合關係をも考へ合せて實施する必要があるので、政府においても銳意かやうな綜合的見地より物價對策を强力に遂行して參りたい。この際お互に相戒めて賣惜み、買溜などの不德行爲を避け、大いに經濟道義の昂揚に盡力されたい。

と說明せられたが、政府の施策を知る爲にあえてこゝに掲載參照した。尙外に少しく國策會社の刷新問題につき記す。

○生產擴充と國策會社の刷新

そも〳〵支那事變以來續々と設立された國策會社、統制會社等の機構並に人事を刷

新すべしとの聲は、大東亞經濟建設が現實に躍進しつゝあるに應じて各方面に擡頭しつゝある。この問題は更に具體化して南方建設の擔當者は財閥か國策會社かの緊急課題ともなつて、心ある者の熟考の對象となつてゐる。この問題を不用意に考へると、國策會社も營團も又は統制會も、色々に名稱は異なるとはいへ、要は國家の必要が生んだ同色的所產であつて、その間に見られる差異は、實は派生的なものに過ぎないと結論づけられる。しかし、このやうな考へ方位課題の意味を抹殺してしまふものはない。成程すべては國家の必要が生んだものには相違ないが、しかしそれを必要とした國家の現實（經濟を中軸とする）には相當以上に質的相異があり、それによつて規定された歷史的存在物であることを注意しなければならない。

國策會社を生んだ背景又は基底は、經濟的にいへば自由主義經濟が社會の原則をなしてゐる段階において、准戰體制から臨戰體制への轉換に即應すべく、從來の經濟原

理に斧鉞をくはへるため、統制經濟が强力に發生、進行してゐる事實にあり、この中にあつて國策の最も尖鋭な代表者（少くとも意氣ごみだけは）として、誕生してきたのが國策會社である。從つて明治時代、大正時代の國營企業體と違つて、それは初期資本主義の線に沿ふものではなく、後期資本主義時代において國益を代表する私的資本主義の否定として現れたものである。しかしこゝで注意しなければならないのは、この意味の國策會社は、私的經濟の支配的環境における否定的存在に過ぎないのであつて、國策會社の公經濟的性質は、常に大なる反擊と動搖とを受けざるを得ないものである。從來國策會社が不評であるのも、機構が杜撰で人事が拙劣だつたにもよるがしかしそれは國策會社を生んだ歷史的事情に內在する矛盾の現れと見る方が遙に適切なのである。

かうなると國策會社の刷新は新しい方途を要する。即ち改革は國策會社の歷史的、

時代的性格の認識に基き、質的に飛躍を遂げた今日の經濟段階に對應して、根本的に、從來の國策會社の殼を脫却したものでなければならない、そこで問題は一變する。そのやうに大手術を施された國策會社は、或はむしろ營團のやうなものになるのではあるまいか、つまり營團と國策會社の境界線の消滅となり、國策會社の特殊性は失はれて、むしろ改惡となるのではあるまいか、といふ懸念も生ずるが、然しこの結論は少々早計過ぎると信ずる。國策會社にはまた國策會社の行くべき道が存する、唯單なる技術的刷新では國策會社が永遠に厚生し得ないと信ずるのである。

この面に於ても又生產擴充の線に沿ふて刷新せらるべき多くを見出すものである。この意味に於て、こゝにも戰時經濟の一課題が橫たわるのであらう。尙次に配給消費と生產品の質につき少しく記述する。

○配給消費面と生産品の質

最近一般に商品の質が數年前に比較して、著るしき低下を示しつゝあることは、すでに定評あるところといつて差支へない。もちろん、この品質低下は、勞力および原料の不足と、その質の惡化の如く、時局柄眞にやむを得ぬ原因に基くものもあり、また公定價格の定め方が、必ずしも悉く合理的でないために、原料と完成品あるひは各商品相互間の、價格が釣合ひを失してゐるために惹き起されてゐる場合もある。しかし、吾人が日常接するところの商品が、殆ど例外なく品質低下を示してゐる最大の原因は、何といつても、公定價格によつて上値を押へられた業者が、商品の粗惡化によつて、より大なる利益を確保しようとする事實に求められねばならぬ。

この品質低下の問題は、公定價格制度の實施に端を發してゐるため、從來物價問題

の一環として、この間からのみ採りあげられて來た傾きがある。しかし、米英との戰爭が長期戰、經濟戰の性格を、はつきりと示してきた今日においては、官廳側も民間業者も、いま少し角度を變へて、この問題を見直してみる必要があらう。

いふまでもなく、こゝに問題とする商品の粗惡化は、專らいはゆる一般民需物資に屬する商品のみに關するものである。直接の軍需關係商品、たとへば飛行機、火藥といつた種類の生產品が、現に不斷の進步改良を示しつゝある半面において、一般民需品が粗惡化の傾向を辿るのは、いかなる理由にもとづくものであらうか。思ふにこれは、多かれ少かれ原料や價格の相違に影響せられてゐる事は、否定出來ぬ事實であるが、その根本的な原因は、軍需品と、一般民需品との取扱ひに對する一般の考へ方の差異によるものありと信じられるのである。

周知のごとく、軍需品については、その品質の良否が直接戰勝に重大關係あるため

各官廳當局側において、品質低下に特別の注意を拂つてゐる一方、民間業者も個人の利害を超越して品質昂揚に打ちこんでゐるのであり、自らの生産を他人のためといふのでなく、國家のため、ひいては自分自身の問題と關じ、戰爭の歸趨と自らの生産との關聯を身近かに感じてゐるわけである。しかるに、一般民需品に對する考へ方は、官廳においても民間においても、未だ多分に自由主義的なるものを殘存してゐる觀がある。すなはち、業者にあつては、民需品生産は單に利潤獲得の問題であり、粗惡品生産は個々の業者の商業道德の問題であつて、一般的には未だ法律の問題とさへ考へられてゐない狀態である。しかも他方、官廳側にあつても、民需生産は物價問題や國民生活安定問題を通じてのみ、戰時經濟に關連するかの如く感じられてゐる嫌ひがあり、これを物資、勞力の節約による國家全體の戰時經濟力增强といふ方面からは、まだ十分に意識されるに至つてゐないやうに見受けられるのである。

民需品生産についていふならば、軍需製造能力の增大を期するためにこそ、軍需品におけると同樣に、その品質改善にあらゆる努力が集中されねばならぬ狀態である。換言すれば、民需品の質の向上によつて、一箇月の耐久力をもつ物品は、須らくこれを一箇月半の耐久力あるものたらしめ、これによつて生じた資材、勞力を軍需方面に振り向けるやうな努力のなされる狀態でなければならぬ。かゝる體制においては、一般民需品の品質の問題は、値段の問題としてのみならず、同時に物資、勞力の問題として理解さるべきものであらう。

かくみて來るとき、粗惡品を造るなといふ從來の商業倫理の運動は、今こそ勝ち拔くために良いものを造らう、といふ生産の戰ひの運動に發展すべきであり、政府當局の頭も、消極的な品質低下の監視から、積極的な品質向上の方向に、重點を移し變へるべきではなからうか。精神運動のみをもつて、民需品生産業者の生産動機のうちに

國家目的を植ゑつけ、利潤の恣意的追求を制約すると共に、公定價格實施以來失はれた觀ある良心的生産への熱意を復興させることは難しいかも知れない。したがつて、民需品生産をして總力戰的生産たらしむるためには、戰時下生産の國家的意義の徹底各種組合等を利用せる技術の研究および優良技術の普及、優良民需品生産者に對する國家的表彰、民需品に關する技術研究機關の擴充創設等の方策と併行して、品質監督を容易にするための規格の整理制限、新製品の一般的許可制、品質檢査制度の擴充ならびに惡質業者の强制的淘汰等の諸對策をも用意する必要あること、またいふを俟たぬ所である。これは國民生活の最低限安定に對する配給政策の面からみても、今少しく留意せらるべき重大なる問題であらう。

○大量生産と質の問題

戰時下尨大な軍需物資の充足に應へるには、大量生産方式が採用されなければならぬのは當然であり、最近各方面で大量生産の意義役割が重要視されて來たことは喜ぶべき現象であるが、大量生産的經營方式の場合、餘りにも機械の力を過大評價し、それを動かす人間の力を忘却することは危險なことである。

一部では「大量生産の場合、理想よりいへば、工作機械としては一臺の旋盤をも使用せぬ位の決意を要する……少くとも大量生産方式においては、特別に設計した單能機械を用ひねばならぬ。さらに、進んでは自働機械の使用にまで進まねばならない」とさへ論じられてゐるが、このやうに機械力を尊重することは、人間の精神力、勞働力を退化せしめる惧れがある。

大量生産品に限らず、總ての工業製品はいふまでもなく原料と勞働力とから成立つてゐる。從つて技術者の努力は最少の原料と、最少の勞働力によつて生産され得る設

計に向けられるのは當然である。アメリカとドイツは夙に大量生産様式を採つて、原料と勞力の遞減に努めて來たが、その進んだ道は自ら異つてゐる。

即ちアメリカは原料の制限は殆ど受けず、最少量の勞力を費すことを企圖した。一方ドイツは原料の制約を受け、その最少量の消費を目指して一面において勞働力は概してアメリカより多くを使用した。言ひ換るとアメリカは若し技術家が無制限の原料を使用することによつて、所要の勞働力を減少せしめることが出來るならば、原料は無制限に技術家へ供給せんとするものであり、これに反しドイツは、たとへ勞働力は多少多く使用されても、原料の節約を圖らうとするものである。この傾向は從來諸種の原料に惠まれてゐたアメリカとして、また比較的原料に乏しいドイツとして當然のことであらうが、勞働力を無視したアメリカ工業界は、如何なる影響を受けたであらうか。

大量生産方式はアメリカ工業の强味とされ、自働車をはじめ建築資材、煖房設備、洗濯機械、ラジオ等々に對する尨大な需要が大量生産方式によつて滿たされて來た結果、アメリカ産業の全體的傾向が、その方向に向ふやうに影響された。かくてアメリカの生産様式と、それによつて作られた製品はアメリカにおける勞働階級に影響を與へた。

即ちその勞働者の教育と人數に影響をおよぼした。また勞働力に依存すべき分野を縮小せしめんとするアメリカ工業の傾向は、單能機の發達を促したとともに、自働機械を愛好せしめるやうになつた。その結果として、機械の操作が簡易化したことは不熟練工や婦女子を雇傭することを可能にした、と同時に、熟練工に對する需要は減少した。餘りにも機械力に頼つて來たアメリカは現在熟練工の不足に惱んでゐるのである。

生産擴充が要請される秋、大量生産方式が採用されなければならぬことは勿論であるが、この場合人間と機械の職分を正しく組織することを忘れてはならない。

これに關して「質を以て量を例せ」と强調せられたる前の中央協力會議に於ける鈴木企畫院總裁の言說は注目に價するところである。以下鈴木總裁發言。……

古來戰爭史にみると、勝敗の問題は懸つて創意と工夫の力にある。例を飛行機にとつてみても毎日々々非常に變つてゐる。更にその創意工夫を生む原動力は、總理が申された戰爭の勝利に向つて國民の意思力、この戰ひを勝たんとする熱意、意力にある。從來の傳統のみを重んじ、自分の小さな經驗のみにこだはつて來るとなかなか創造が生れない。戰爭は非常な消耗を伴ふもので、この消耗に堪へ補塡し更によりよき、より多量の生産を生んで行くといふことはなかなか問題で、工夫努力を要する。

總力戰態勢における物資動員計畫、國民動員計畫は結局人の問題であり、人の問題は創意工夫を生む精神力の問題、叡智の問題、更に勞働力の問題である。かくして政府は人口、保健、文教の問題に非常に力を致さうとしてゐるのである。質の良い健康な國民を多々益々玆に持つといふことが、この大業を完成する上において根本的な問題である。

物の問題、これは非常なる消耗を補塡するのみならず、その質を敵に勝るものを持つ、アメリカの持つてゐる物の量、その生産力に比較すれば、わが國の持つてゐる生産力といふものは比較にならないが、この比較にならない所のものを以て敢て勝利の確信を持つといふのは、その勝利の確信を持つ所の幾多の原因が玆にある。問題は良きもの、さうしてその良きものを効率的に使ふといふことに歸着すると思ふ。敵が百機の飛行機を以て戰ひを挑む時に、我は十機を以てこれを斃す以外に勝

つ途はない、それを作戰の上には統帥がこれに向つて叡智を傾ける。またさういふことのために軍を訓練させてゐるのである。アメリカの鐵の生產力が八千萬トンであり、この八千萬トンがわが國の鐵の生產力、吾々の負擔の上にどれだけかゝつて來るか、さうして吾々の持つてゐるところのこの鐵の量を以て如何にしてこれに打克つか、かういふ問題になる。つまり吾々の持つてゐる物の生產といふことは單にその量の問題でなく、その質またその効率の發揮の上に非常なる努力を拂はねばならんと存する。さうしてその計畫の遂行を活潑にするには、どうしても物の實體といふものが明にならねばならない、また實體が明にならねば創意と工夫は生れぬのである。

以上の如くである。尙次に少しく國民日常生活的の面から配給の圓滑化につき記すことゝする。

○生產活動と食糧配給の改善

經濟の實質を動かすものが、單に倫理的觀念によつてのみなされる事の不可能さは勿論であるが、それにしても現在の食糧配給網に見られる一種の闇的或は不愛想的行爲は、商報聯乃至商業中央組合で提唱してゐる戰時奉公理念を遠ざかるもの相當なるものといへやう。業界の上層部では、旺に倫理的國家觀念の高唱をなすにもかゝはらず、現實に直接に民衆に接する部面が闇的行爲に專念するが如きでは、商業報國の實現未だしといはざるを得まい。配給の不正とは別に、不正なる加工をして暴利をむさぼる奸商の摘發も傳へられる有樣であつてみれば、銃後食糧機關の重大さを認識することのより一層さが痛感される。

食糧の問題は、單にそれのみでなく、凡ての國家產業行政にも直接に影響するもの

であり、金融上からは、貯蓄奬勵の効果を減殺し、インフレの危機醸成に役立つし、産業的には勞働能率の發揮に響くのであつて、食糧配給網は、謂はゞ戰時國防經濟の最重要部面ともいへるのである。現在勞務者の緊張が問題となつてをり、婦人勞働者の男子への代換が叫ばれてゐるにも拘らず、比較的婦人勞働者進出の緩慢なのも、食糧配給所に、莫大なる勞力と時間を要することにも影響されてゐるのである。

從つて食糧配給網の改善は、一方において特に惡質違反者の檢擧をなすのみでなく十分その間における矛盾の是正を考究し、使命の重大さを認識させる精神的訓練とともに、商行爲上の機微を巧に取り入れて、商行爲が終身行爲と異るところを考へてからゝらなければならない。

最近に於て食糧配給網の一齊臨檢をなしたところ、相當惡質の違反があつて銃後生活の健全化に對して、反對的傾向を示してゐたことは、甚だ遺憾とされてゐる。曾ては、戰時統制經濟の當初において、財界に所謂闇行爲が續出し、國家經濟運營の上から支障少からずとされ、戰時經濟に對する倫理の確立が叫ばれたのであるが、このことは現在の配給機構についてもいへることである。今一段の改善こそ要望されるところである。

○必需品配給と運用の圓滑化

最近國民生活面に於ける消費材の配給は、どうやら板について來てはゐるが、各家庭に於ける青物、魚等の婦人連の買出し立ちん棒姿は未だ解消さるべくもない。又夕方等ビヤホール等の前で長々と列を爲して開店を待つ一般大衆層の姿は、戰時下のあまりほめられた姿でもない。もう少しこれ等も運用の圓滑化と、配給の重點主義によつて、高級料理店より先づ大衆向へやるとか、家庭の買出しは隣組と配給店の話し合

ひで當番買出しをやるとか、何んとか體制强化を必要とするであらう。元々少い物資を最善に配分するのであるから不便は當り前であるが、配給の圓滑化と生産力の擴大が密接の關連をもつからには、こうした生活面の事柄も中々に重要の意義を有するであらう。理論は別として働く人々に對する生活品配給の各面はもつと運用の圓滑化を期さねばならぬ。これは只單に指導者側のみでは出來ない事であるから、大いに消費國民も協力して、よき配給體制を强化して、この長期戰を完遂せねばならぬ。政府施策の萬全と相俟つて漸く軌道に乘りつゝある配給の具體面につき一言したが今後一段の圓滑化を期したい。「生産と配給」了。

昭和十七年十月廿日　初版發行
昭和十七年十月廿日　初版印刷
「二千部」
【定價金貳拾五錢】

著作者　東京市中野區上町四
發行人　日滿支拓殖文化研究所　清水秀雄

印刷者　東京市本郷區元町二ノ九　江島榮太郎

印刷所　東京市本郷區元町二ノ九　隆文舍印刷所
（東東一五二一）

發行所　東京市中野區上町四　日滿支拓殖文化研究所
振替口座東京一五〇八一六番
會員番號一二二〇三一番

（認承協文出號
ア180218）

配給元
日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二ノ九

Cat.

定價二十五錢